



災害医療への理解向上に尽力

熊本大学病院 災害医療教育研究センター 笠岡 俊志 教授・センター長

かさおか・しゅんじ/山口県下関市出身、1961(昭和36)年6月29日生まれの58歳。山口大学医学部医学科卒。山口大学医学部病院第2内科医員(研修医)、山口大学大学院医学研究科博士課程修了後、国立下関病院内科医師、山口大学医学部附属病院総合診療部助手、カリフォルニア大学アーバイン校医学部循環器部門研究員、山口大学医学部附属病院先進救急医療センター講師、同大学大学院医学系研究科救急・生体侵襲制御医学准教授、熊本大学医学部附属病院救急総合診療部教授、同病院災害医療研究センター長を経て現職。趣味は映画鑑賞。

文書プログラムに採択され昨年10月に開設

「国内では次から次に自然災害が起こっているが、災害医療について広く理解されているとは言いがたく、医療者にとっても非日常。当センターは災害医療に関わる高度人材育成を行うことで、災害への備えに貢献していきたいと考えている」と話すのは熊本大学病院災害医療教育研究センターの笠岡俊志センター長。

同センターは文部科学省が公募した「課題解決型高度医療人材育成プログラム」の「医療チームによる災害支援領域」に採択されたことに基づき、昨年10月に設置された。同領域で採択されたのは東北大学(宮城県)と新潟大学(新潟県)で、いずれも東日本大震災や中越地震など大きな自然災害を経験した被災地であるという共通点がある。熊本地震では入院患者の全避難を余儀なくされた医療機関も複数発生するなど、被災した経験をもとに良いプログラムを作ることができたことが採択につながったのではないかと分析する。

「元々循環器が専門だが、心疾患や脳血管疾患など循環器科とも関わりの深い救急医療の統括を担うなど、専門分野が増えた。災害医療と救急医療の関わりが深く、日本災害医療学会にも参加していたことから、必要性を感じていた」とセンター長としての職務に意欲を見せる。スタッフも医師や歯科医師を含む多職種9人が専従として教育に携わっている。

熊本だけでなく全国に発信を

カリキュラムの特徴としては「多職種連携の災害支援を担う高度医療人材養成」として、医師や歯科医師、薬剤師、看護師、栄養士などの医療職に加えて行政担当者を対象としており、職種別にコースを設けている点が挙げられる。

さらに、災害発生から復興までの期間になぞらえて、超急性期から急性期、亜急性期、慢性期という長い期間に渡った医療ニーズに対応できる人材を養成するプログラムを組んでいる。「多くの大学で『災害医学』という科目はなく、特化した教育は

行われておらず、『救急医学』の中に災害医療の項目があるくらい。一方で、いざ災害が起こると大規模になる。そういった場合に想定される多数傷病者に対応するには学部教育では足りないのが現状で、卒業教育でも学ぶ場が少ない。当センターで学び、各病院で災害医療を担ってもらいたいというのが願い」と話す。

準備期間を経て今年7月から養成プログラムがスタート。北は青森、南は沖縄から医師19人、歯科医5人、看護師15人、薬剤師9人が学んでいる。講義は熊本大学大学院でも取り入れているEラーニング形式で、対面でも受けることができる。

「全国的にも災害医療に特化したセンターは少なく、九州では唯一。教育だけでなく、もう一つの柱として災害時の医療対応に関する研究も行っており、教育と研究を通して県内だけでなく全国に発信していく。経済界の方々にもご理解と支援をお願いしたい」と呼びかける。